

エルミナーージュ ゴシック リプレイ小説

彷徨の王、白銀の獅子王 1

【登場人物 その1】

	<p>・ターナ（人間／戦士） 冒険者として、一人旅をする戦士。 その風貌から、高貴な出のように思われるが、その詳細は不明。 本編の主人公。</p>
	<p>・ドーガ（ワービースト／司教） 駱駝の姿をしたワービースト（と本人は言っている） 口は悪いが、その口調からは想像がつかないほどの古今東西の知識を有しているが、表だってそれをひけらかすことはない。</p>
	<p>・シューネ（ノーム／薬草師） 医者になることを夢見て、薬草師の修行をするノームの少女。年齢の割に子どもっぽい口調なのは、種族特有なのかは判らない。 手先はあまり器用な方ではない。</p>
	<p>・ナハト（ホートルット／盗賊） ホートルットの中でも、特別な地位にいると思われる謎の人物。 ある人物を探す目的で、ターナ達と行動を共にする。</p>
	<p>・ツバメ（人間／侍） 己の技を磨くために、一人各地を旅する侍の少女。 いたってまじめな性格で、礼儀正しい。 幼いころに生き別れた兄弟がいるらしい。</p>
	<p>・ランベルド（エルフ／錬金術師） 最初は別のパーティで、洞窟調査をしていたが、何らかの原因で、一人だけになってしまう。 その原因を探るために、ターナ達のパーティに加わることに。</p>

冒険者と言うのは、その場限りの仲間であつたり、生涯死ぬまで共にする戦友であるか、または腐れ縁でズルズルと生涯共に居ることになるか…のどちらだろうと、カウンター越しから見る冒険者たちの姿を見て、酒場の主はそんな事を考えていた。

長らく酒場の主として、数多の冒険者たちを見てきた。

一仕事終えた後なのか、それとも貴重なものでも手に入れたのか判らないが、とても上機嫌なパーティ、しみみりとした顔で死んでいった戦友を偲ぶかのようになりたてと見える若造…顔を一目見れば、誰がどんな心境なのかは、すぐに見て取れた。

また、その冒険者が善・悪・中立、どの戒律に居るのかもだいたい判るようになった。

ある時、一人の冒険者がどうしてそれが判るんだと聞いたことがあつた。

「ここでは善と悪の両極端の戒律は、パーティを組めないが、いったん外へ出ると、たまに両方の戒律の奴らがその場限りの混成パーティを組むときがある。当然、双方考え方が違うから、いざこざが起る訳だ。その間に立つ中立は板挟みになりやすく、胃と頭が痛くなる。その日の冒険が終わってここに帰ってくると、いつも頭と腹を抱えて帰ってくるのが見えるから、そいつは中立だと判るんだよ。まあ、善と悪は見た目で判断してる部分もあるが、あながち間違っちゃいねーなあ…」

と、得意げな顔でパイプをふかす。

ドンドウの酒場は、大陸を歩き交う途中にこのイシュマグ王国に立ち寄った冒険者たちでこつた返していた。

何時もと変わらぬ日常がそこにはあつた。

あの“お触れ”が出されるまでは。

イシュマグ王国へと続く道を、馬車がゴトゴトと音を立てながらゆっくり走っていた。

*

馬車と言つても、貴族が乗るような立派なものではなく、単なる幌馬車のようなものである。

王国へ届ける荷物を積んだ幌の中に、荷物に交じって一人の戦士が乗っていた。

見た目は若く、何所か良いところの家の出と思われる雰囲気をしていた。

ゴトゴトと揺れる馬車の居心地は、決して最高とは言えないが、タダで乗せてもらっている以上、文句は言えない。

また、時として魔物が襲ってくるため、運動がてら相手をするのも悪くはない。多かれ少なかれ経験も積めるのだから。

「おう、どうしたどうした」

不意に馬車が止まる。

何事かと戦士が幌から降りて、馬車の前の状況を確かめる。

道の真ん中で、大きな荷車が立ち往生していた。荷車の先には、荷車を引いていたと思われる馬が二頭倒れていた。身体中に傷が見える。どうやら魔物にやられたようだった。

「おおい…助けてくれ……」

か細い声が聞こえた。

良く見ると、馬のそばには荷車の主らしき男がうずくまっていた。

「ま、魔物の群れに馬をやられた……。幸い荷物は無事だが、このままじゃ

イシユマグには届けられそうもない…」

彼自身も怪我を負っていた。戦士は、手持ちの傷薬で応急処置を施すが、傷は思ったよりも深く、完全には出血を止める事が出来なかった。

「こんな時に、僧侶か司教がいれば…」

空になった傷薬のビンを投げ捨てながら、戦士はそう呟いた。

「お呼びかな？」

後ろの方で声が出た。

「俺でよければ、手助けするが？」

駱駝。言葉話す駱駝が、ゆったりゆったりこちらに近づいてくる。

世間一般的なワービーストは、人に近い様な姿をしているが、これは見たままの駱駝。こんなワービーストを見るのは、生まれて初めてだった。

「あーあー、こいつはちつとばかり深いなあ。どれ…」

駱駝は、男の傷を見て何やらぶつぶつと呪文を唱え始めた。

次の瞬間には、男の傷はふさがっていた。

「フィリア程度の回復呪文だ。出血は収まったがしばらくは痛みは続く。家に帰ったらしばらく養生してな」

「あ、ありがとう…。あんたは一体」

「通りすがりの司教でさあ。ナリはこんな形してるが、一応はワービースト

つてとこだ。酔狂で司教なんざやってる」

駱駝は男のそばで息絶えている二頭の馬に目をやる。

「こいつらは残念だが、埋葬するしかないようだな。やられ方が酷い。さすがにロハグラ寺院でも復活は難しいだろうな。良くて灰化と言ったところか」

「そいつは困った…この荷物をイシユマグまで運ばないと、これからの生活がままならなくなってしまふ…」

頭を抱えた男を横目に、駱駝は荷車に結ばれた革のベルトを啜えた。

「馬には負けるが、俺が引っ張ってやろう。司教といえども、身体の一つや二つは鍛えておかねばどうにもならん。どのみち、イシユマグは俺も行くところだったしな」

「なら、オラの馬車にも少し積むがいいだ。こっちにはまだ空きがある」

「それならば、荷車の荷物をすべて幌に移して、怪我人をその荷車に乗せればよからう。そのままでは傷に障るだろうから、私の毛布を底に敷くといい」

「話が解る人達だねえ。そうしてくれるなら、俺としてもありがたいこった」

二頭の馬を道の外れに埋葬し、荷車の荷物を男たちが幌へと移しかえる。

準備が整い、幌馬車と駱駝が引く荷車がゆっくりと動き始めた。

戦士は、荷車のそばで歩く。

「しかし兄さんよ、ここ最近このあたりも魔物が多くなってきたと思わないか？」

「お前もそう思うか？」

「明らかに以前より数が増している様だ。聞くとところによると、イシユマグより遠く離れた洞窟が臭うという話らしいが」

「ツン・クーン洞窟か？」

「御明察。最近王国の兵士たちが、ひっきりなしに出入りしているという噂もある。…どうだい、アンタもアテがないなら一つ調べてみないか？」

駱駝が顔色を伺う様に戦士の顔を覗き込む。何やら下心があるような気もするが、さてどうしたものか。

「あんたは戦士だろ？ 俺はしがらない司教だ。司教は使える装備品も戦士と違って少なくて、何かと不便だ。頼りになる戦士が一人は欲しいな」と思ってたところなんだよ。アンタにとっても、魔術師と僧侶の両方の呪文が使える、且つ鑑定もできる司教は何かと便利かもしれないぜえ？ 使えるまでに成長するには、ちっとばかし遅いがな」

「……」

戦士はしばらく黙って考えていた。

特にこれといった目的があるわけでもないが、まるっきりこの駱駝の言う事を信用したわけでもない。

少し疑わしいと思ったが、時には騙されてみるのもまた一興かと、酔狂にもそう思い始めた。そして、考えた末にようやくその口を開いた。

「その噂が本当かどうかは知らんが、一つのってみてもよかろう」

「そうこなくちゃ」

駱駝はしたり顔で笑った。

「俺はドーガってんだ。兄さん、アンタは？」

「……ターナ」

「ターナか。ま、どれくらいの付き合いになるか判らんが、仲良くやろうぜ」

*

イシュマグ王国まであと少しの所まで来ていた。

遙か眼前にイシュマグ王国と思わしき輪郭が見て取れる。

イシュマグに近づく度に、魔物が増えてきているような気がする。スライムやアースワーム程度の小物ではあるが、まとまった数で来られると少々分が悪い。行きつく暇もない。

ターナとドーガにも疲労の色が見え始めていた。

「こいつは思った以上だな。噂もホントじゃねーかと思えてくるぜ」

蹴散らした魔物の残骸を見て、ドーガが吐き捨てるように言った。

口では余裕ぶっているが、呪文もほとんど尽きてきている。どこかで休息を取りたいが、休めそうな場所が見つからない。

二人だけなら野宿もあるだろうが、沢山の荷物を積んだ幌馬車に怪我人を乗せた荷車。野宿などしようならば、立ち向かう術がなければたちまち彼らは餌食になってしまうだろう。

万一死亡したとしても、死者を復活させる事が出来るというロハグラ寺院で復活させる事もできるだろうが、それも完璧ではない。

寺院とて失敗もある。いつぞやも遺体の損傷が激しい冒険者がロストしたという話を聞いたことがある。

遺体の損傷が酷ければ酷いほど、復活できる確率が下がるらしい。

その前には、刎ねられた首をうっかりとダンジョンに落としてきてしまい、結果的にロストしたという話もある。

何としても、それだけは避けたい。

何所か安全に休める場所を探さなくては、周りもすっかり夕暮れ色に染まってきている。このまま夜になってしまえば、何所から襲われるか判らない。

表情とは裏腹に、二人は焦っていた。

休める場所を探しつつ歩を進めるドーガが何かを踏みつけた。

スライムのようにぐっちやりとした、何とも言えないような感覚ではなく、もう少し肉のついた…例えば人のようなものの感触。

「うわぁ!」

思わずドーガが叫んで、踏みつけていた足を上げた。

「ふぎゆう…っ!」

踏みつけられた物体が唸った。

「なんでこんな道のど真ん中で突っ伏してんだお前え…!」

「ハーブ…!」

「は?」

「ハーブを見つけたんでし。こんな道のど真ん中に、迷宮ハーブが生えてるなんて珍しいから採取してたんでき!」

土まみれの顔で、ドーガの顔に草のようなものを突き出している少女が起き上がった。

「お店で調合したら薬になるんでし。シューネは立派な『おいしや様』になるために修行してるでし!」

シューネと名乗る少女は、ターナより頭二つ分くらい小柄で、少し垂れ気味の大きな耳をしていた。おそらくノームだと思われる。

「それは判ったが、何でこんな所で草むしりなんてしてんだよ!」

「そこにいるお姉ーしゃんが毒で苦しんでるんでし。シューネ、薬を切らしてしまっただし。だからハーブを採って、調合して助けてあげたいんでし!」

シューネが指さす方向に、道のそばに一本だけ大きく伸びる木があった。その根元で、苦しそうな顔をもたれかかる人影が見えた。

「でも、採れたハーブがこれだけなんでし。調合するには数が足りないんでし!」

「解毒薬があれば一発何だが、あいにく解毒薬はもってねえし、ビネムフィを唱えられる力が残ってねえんだなこれが…!」

「残念ながら、私も薬の持ち合わせが切れてしまっただし。一体どうしたのか!」

夕闇が差し迫る中で、三人は黙り込んでしまった。軽度の毒であっても、そのままにしておけば、何時かは死んでしまう。

「ひよっとしておめえさん、薬草師だか? 荷物の中に確か、迷宮ハーブの在庫があるで、それで何とかならんかね?」

幌馬車の主が荷物の中からハーブの束を差出した。

「…できるでし! 迷宮ハーブを二つ調合するとできるでし。あとは調合するものがあれば作れるでし!」

「それなら、オラが使ってるのがあるだ。何い、昔薬草師まがいなことしてたっから、持つてるだけでよ。早よ作って飲ませてやんなせえ!」

幌馬車の主からハーブと道具を受け取ると、シューネは早速薬作りに取り掛

かった。その様子を遠巻きに見るが、どうにも危なっかしい。

まだ薬草師になりたてではないかと思えるくらいだった。小型の石臼のようなもので、何故か自分の指を詰めてみたりと、手つきが見るからに危なっかしい。それに、どこをどうすれば、あんな毒よりも毒々しい色の液体ができるかと、失敗作に凶器さを感じてしまうのは、どういふことなのかという疑問が二人の間に生まれる。

二、三度失敗をしながらも、何とか解毒薬が出来上がった。

「あとはこれを飲ませるだけでしょ」

あたりはすっかり夜になっていた。

*

薬の効果もあつてか毒気は抜けたが、長い間毒に冒されていたらしく、少々熱が高い。

一行は、そこに簡易のテントを作り、中で休ませることにした。成り行きとはいえ、そのままにしておくこともできず、更にこちらも怪我人を抱えているという事も踏まえると、良い間の中を強行軍で行くのも憚られるものがあつた。

「見た感じ、侍のような雰囲気だな。まだ成人前の様にも見えるが、女一人でこんな所まで……」

たいまつを手に、当たりを見回っていたターナがぼつりと言った。

「最近じゃ、女一人旅つてのは珍しくもなくなったが、如何せん旅に慣れていない奴らが多くて、下手な奴はどこかで生き倒れになるってのもそう少なくないらしいぜ？ 理由は何にせよ、自分の力量を弁えてないと一人旅なんてできるもんじゃねーぜ」

「確かに。私とて、最初の頃は心細いという思いより、とにかく死んではい

けないという思いの方が強かつた……」

「ほう。そう言えば、兄さんの事聞いてなかったな。どうせしばらくの付き合いになりそうだし、お互いの事を知っていても悪くはねーだろ」

テントの近くでパチパチと音を立てて燃える焚火を挟むように、二人は座り込んだ。

「らっしやい。酒かい？ それとも人待ちか？」

*

冒険者と言うのは、皆が皆酒を飲むとは限らない。

酒豪な奴もいれば、下戸な奴もいる。それに、ハナっから飲まない奴。

……大体はその三つに分けることができる。

飲まない奴は、飲めないからではない。何か『理由』があるから飲まないのであつて、冷やかしても何でもない。

「……人を探している」

カウンターの隅に座った人影がそう言った。

小柄な体格はドワーフかノーム、ホートルットを思わせるが、経験からいえばホートルットの方が正解に近いかと思われる。

こういうのは、本人に聞かなくてもわかる。大体の背恰好で誰がどの種族なのかは。

「そうかい。このドンドウンの酒場には、毎日入れ替わり立ち替わり冒険者の野郎どもが来る。昨日来た奴が、今日には灰になって帰って来たなんて事は日常茶飯事だ。人探しなら、尚更だな。注意深く見てないと、何時灰になって来てもおかしくねーからな……いや、灰になったつーか、死んで帰って来た時点

で寺院行きだから、ここには来ねえがな」

その言葉を聞いていたか、聞いていないかは判らないが、納得した様子だったので、それ以上の干渉はするまいと、酒場の主人は自分の前に座ってきた他の冒険者の相手に回った。

「大体の見当は付いている…」

ホートルットは、誰に言うでもなく呟いた。

「おやっさん、また珍しい客が来てるね」

酒場の主人の前に座った冒険者が、物珍しそうにカウンターの奥に座るホートルットを見ながら言った。

熟練の戦士らしく、肌は褐色に日焼けし、戦いで古傷があちこちに見受けられる。

「そうなのかい？ おそらくホートルットの類だろうが、変な面まで付けて気味が悪くて仕方がねえ」

「…ホートルット！ やっぱりな。そうだろうと思った」

戦士が小さく感嘆の声を洩らす。

「お客さん、あのホートルットをどこで存じで？」

「別に知り合いじゃねーけどさ、以前別の街で聞いたことがあるんだよ。ホートルットの中でも、特別な部類の奴らがいる、何でも盗賊や忍者の奴らがいるって話だ。しかも、そいつらは、ああいった面をつけて、奴らにだけ許された格好をしている。何をしているのかは判らんが、きっとアングラな事でも

もやってるんじゃないかな」

グイッとコップに入った酒を一気に呷ると、戦士はカウンターを後にした。主人は、空になったコップを水を張ったタライの中に沈めた。

軽く水洗いしながら、カウンター奥のホートルットに視線を向ける。距離はあるにしろ、微かにではあるが、殺気のようなものを感じた。

今でこそしがたい酒場の主ではあるが、以前は冒険者として各地を回っていたこともあった。相手の雰囲気を読むのは造作もない。それは冒険者を引退してからも鈍ってはいない。

(…また厄介な客が来たもんだぜ)

そう心の中で呟きつつ、洗ったコップを棚に戻す。

何気ないその動作でも、何故か身体に緊張感を漂わせていることに気づいた。

(あの戦士め、余計な事を言いやがって…)

身体中の緊張を解くのと同時に、ため息が出た。気分を紛らわせようと、煙草に火をつけ、その紫煙を身体に吸い込むも、どうにも気が散ってか逆にもせてしまった。これにはもう苦笑いするしかなかった。

*

翌朝。ターナがテントの中を覗くと、中には誰もいなかった。

「中の人なら、日が昇る前に出て行っただよ」

幌馬車の主が、眠たげな顔をして言った。

ドーガとシューネはいつの間にか仲良く並んで、今だ眠りこけていた。

「オラも気づいたのは、そこから出て行くところだったんだが、何も言わずに出て行った」

「行き先は？」

「さあ。ただ、この先の道を進んでもイシュマグ王国しかねーでなあ。きっとそこへ向かったんでねえかなあ」

「そうか…」

ターナは、自分の足元で無様な顔をして寝ている駱駝の頭を、足の先でちょんと蹴った。

「んだよ…もう朝なのか…？」

無様な顔の駱駝は、器用に一本の脚で涎を拭くと気だるく起き上がった。

「そう言えばよ、昨日の侍のねーちゃん、どうした？」

「ああ、今朝早く出て行ったようだ。おそらくイシュマグへ向かったと」

「そうかい。じゃあ、何所かであた会うかもしれないねーな。…と、それよりこのノームのチビちゃんはとうすんだ？」

「目的地が同じなら、我々が連れていくのが無難だろう」

昨夜、シューネとも経緯を話したとき、彼女もイシュマグへ向かう用があると言っていたことを思い出していた。そこに身内がいるらしい。

ノームは僧侶や司教などの信仰に関わる職に就くことがほとんどだが、時としてその能力を持たないノームも生まれる。シューネもその一人で、その事を悔み、呪文の代わりに薬で人々を治す薬草師に、ひいては医者になることで人の役に立つようとしていたのだった。

イシュマグには、もともと僧侶であったが、今では薬草師に転じた彼女の身

内が住んでいるという事で、その身内に師事しようと一人やってきたのだという。そして、その道中で毒に倒れる侍の少女を見つけたのだった。

「人の縁つてのは、不思議なもんだな。まったくの赤の他人同士が、こうやって何かのきっかけでつながっていく事もあるんだからなあ…」

軽い朝食を済ませ、イシュマグへと歩みを再開した。

その日は昨日と違い、比較的穏やかに歩を進めることが出来た。そのせいもあってか、イシュマグへは昼ごろには到着していた。

「お前えさんがたには、世話になっただよ。またオラの村に来る事があつたら、遊びに来るだよ」

幌馬車の主と別れ、怪我をした荷車の主を医者に預ける。そこでシューネとも別れた。その医者が彼女の身内だったようだ。

「さて、これからどうしますかねえ。まずは宿探しからか？」

おのぼりさんの様に、辺りをジロジロと見まわしながらドーガが言った。

ドーガにしてみれば、街全体が珍しいと思うだろうが、街の人間…に限らず、イシュマグの外から来た冒険者たちの視線は、当然ドーガに向けられる。

「何だよ、みんなジロジロ俺を見て…。しゃべる駱駝なんて珍しくもねーだろ！ ワービーストで見慣れてんだろ？」

いくらワービーストでも、ここまで完璧に駱駝である者は誰も見たことない。ワービーストならもっと人型であるというのが、普通の人間の感覚であろう。しかし、ドーガの姿はその常識を超えてしまっているかのようにも思われた。

犬や猫が二足歩行して人の言葉をしゃべるのなら、ワービーストと認識しても誰もが納得するが、二足歩行もしないで、四つ足で人の言葉をしゃべる動物…となると、どう表現していいのかわからなくなる。ワービーストでいいのかわかるのか。それとも別次元の生き物なのかどうか。

普段ならワービーストは、子どもたちが興味を示して近寄ってきてくれるが、この駱駝に至ってはそれが無い。怖いのかどうかは分からないが、

子どもですら、この意味が分からない駱駝より、怖いけどかっこいいドラゴニュートを選ぶだろう。

しかし、周囲の興味はすぐに失われ、何事もなかったように今までと変わらぬ生活に戻って行った。

今まで散々奇特なものを目にしてきたためなのか、それとも何度も駱駝型の召喚魔物でも連れた冒険者でも見てきたためなのかは判らないが、

それでも、経験浅い冒険者などは、他のメンバーや街の人たちの興味が他に移った後でも、物珍しそうに何時までも見ていたのだった。

「こうじろじろ見られちゃ、さすがの俺だって恥ずかしいぜ。さっさと宿でも決めちまおうぜ…」

と、宿に向けて足を向けた時だった。

にわかに街の広場が騒がしくなった。何やら人だかりができています。

何事かと群がる群衆をかき分けて、周囲の視線の先には、王国の兵士と思わしき鎧姿の男が一人立っていた。

「国境の洞窟に魔物が出るとの噂あり、このたび調査隊を派遣するに当たり希望者を募る」

「噂の真偽を突き止めたものには褒美を出す。以上」

そう言い終わるや、その場から颯爽と姿を消した。

兵士がいなくなった後の広場では、人々があれやこれやと噂話に花を咲かせている。

「へえ。噂の真偽を確かめたら、王様から褒美だよ。こいつは面白くなってきたな」

ドーガが鼻息を荒くして息巻いている。

「どうやら、噂の真偽よりも、褒美をもらえることに希望を抱いているようだ。」

「しかし、調査隊といっても俺達二人では心細いと思わねえか？ 相手は得体の知れねえ魔物だぜ？ ここまでの道中で出くわした奴らとは違つかも知れねえし、後々の荷物も…じゃなくてだな、東の間の事でもだな、互いに背中を預けられる相手って欲しくねえか？」

「それで、私にどうしろというのだ？」

「いや、別に兄さんがどうしろというわけじゃねーけどよ、まあ何だ、あと四人ばかりメンツを集めようってわけだ」

*

王国からのお触れが出された後の酒場は、何時にも増して忙しい。

なにしろ、報酬が絡むという事もあって、我も我もと腕に覚えありという風な者から、訓練所から出たてではないかと思えるようなひよっこ冒険者のような者まで、さまざまな種族と野望を抱いた冒険者たちでこった返していた。

その酒場の隅に、一人異様な雰囲気の人影が黙ったまま座っていた。

「今日も人探しかい？」

酒場の主人がまたかというような顔で、少し離れたところから声をかけた。

「…あんたには、関係のない事だろ？」

仮面の奥の瞳がちらりと自分の方を見ていたかと思うと、すぐに視線を戻す。はあ。とため息をついて、酒場の入口の方を見る。

また新しい冒険者達が、地位と権力のためなのか、宵越しの金を稼ぐためなのか、それとも己の技を磨くために個々の来たのかは判らないが、それぞれの思いを胸にこの酒場の扉を開けて入って来る。

——ほら、また扉が開いた。今度は何だ？ またお触れ絡みか？ 今日で何度目だ？ そう言った理由でここに来るのは。

だが、それは俺には関係のないこと。相手がどういう理由でここに来るかなんて、この酒場を切り盛りしていく上で何の足しになるというのだろうか？

…おい、待て。確かに俺だって昔は冒険者なんてやってたが、こんな光景は初めて見たぞ。俺は夢でも見ているのだろうか？ いや、そいつはお前の召喚魔物なのか？

「うーえ。酒臭せえ。ま、酒場だから仕方ねえか」

目新しい冒険者が二人。いや、一人と一匹と言った方が正確なのだろうか？

一人は、この地方では見た事がない模様で織られた織物で身を包んだ、戦士のような人間と、ありや何だ？ 豪華な織物を無節操に纏った駱駝ときたもんだ。しかも何か喋ってないか？ 俺の耳がおかしくなっちゃったのか？

「よおオヤジ。誰かいいツレはいないのか？」

一番不思議に思っていた駱駝から声をかけられ、一瞬酒場の主人はドキッと

した。特別驚くようなことでもないが、このような場面に慣れていないといえ、聞こえがいい。

「今ウワサのツン・クーン洞窟に行くのに、四人ばかり人員が欲しいのよ。誰が残ってるかわかるか？」

「お客さんも、あのお触れでここに来たタチだな？ 戒律は？ はあはあ、二人とも悪ねえ…そうは見えないけどねえ」

パラパラと訓練所から送られてきた名簿と、この酒場にある冒険者の帳簿を見合わせる。

イシユマグの訓練所で、冒険者に必要な最低限の技能を習得した者は、訓練所の名簿に自動的に登録され、定期的にドンドウンの酒場に送られる。

また、地方からここに来てきた冒険者で、仲間を募集したい時に、酒場の片隅に置かれている帳簿に自分の名前と職業、戒律、簡単な募集の内容を書き、パーティ参加希望者を募る事もある。

しかし、これは絶対的なものではないので、成り行きで、気が合えばその場で仲間になったりという事もよくある。名簿などというものは、ある種の形式的なものでしかなかった。そもそも、その存在を知っている者がどれ位いるのかというのが本音だろうが。

「うん…。今のところ悪の戒律で余ってるようなのは、この名簿にはないねえ。中立でよければ、いなくもないが、それでも足りねえだろうね」

「なんだよ、善の戒律ばかりが集まってんのか？」

「いや、そうという訳じゃないが、件の洞窟で生きて帰ってこない奴らも多くて、命からがら逃げてきた奴なんかは、元は悪って奴が多いんだ。それが、死にたくねえから、傷薬も無くなつて友好的な奴らから逃げ回ってたら、いつの間にか戒律が悪から善に変わってるって訳だ。よっぽどの腕っ節じゃないと、悪のままのスタンスを保つのが難しいらしくてな…。憧れだけで悪の戒律に身

を染めるような奴が、方々の体で逃げ回ってきて終いには善に傾いてんだから、ここ最近の笑い話には事欠かないぜ？」

要は、あんたたちもそんな風になりたくないなら、洞窟調査なんてやめておけという視線をちらつかせていた。

しかし、褒美と言う欲に目がくらんでいた駱駝には、そんな事は然して気にもしていないような口ぶりで返す。

「まあ、戒律がどうこうというのはそんなに問題じゃねえ。問題は、メンツが足りるかどうかなんだ。中立がどれくらいいるんだ？」

「そう慌てなさんな、今調べてやる。…ああ、侍が一人に薬草師が一人だ。後は、わかるな？」

つまり『他は全員善の奴らだ』ということである。

「二人か…。まだ人数的には少ないが、戒律の違いであれば仕方ないだろう」

「そうだな。オヤジ、その二人呼べないか？」

「ああ、それでいいなら俺から二人に連絡しておく。明日また来てくれ」

パタンと名簿を閉じると、何やらメモのようなものを二つ書いて店の奥に消えた。

「それじゃ、今日はもう宿でも取って寝ちまうか」

満足な人数ではなかったことにドーガは少し肩を落とし、酒場を後にする。その後を追う様に、ターナも外へと出る。

「……成程。こいつはいい」

先ほどまでのやり取りを見ていた、仮面のホートルットは音もなく席を立ち、二人の後をついていった。まるで音を殺すかのような動きに、誰ひとり気づくことはなかった。それ以前に、それまでこの酒場に『それ』がいたということすら気づいていなかったのかも知れないが。

*

「その戦士と駱駝」

酒場を出た二人の後ろで、涼やかな声があった。しかし、背後からは気配を感じない。最初は空耳かと思っていた。

「お前達が仲間を探していると聞いてな…」

声の方を振り向く前に、目の前にそれは姿を見せた。

「音もなく、気配も消して瞬時に俺達の前に回ってくるなんぞ、テメエ…」

「余計な詮索は無用だ。私はナハト。しがない盗賊だ。さる事情である人物を探している。そのついでにお前たちの余興に付き合ってもいいぞ？」

仮面のせいとか、男とも女ともわからない声で、静かにナハトと名乗るホートルットは言った。敵意は持ってはなさそうであるが、時々感じる殺気が肌に刺さるかのように鋭いのを二人は感じていた。

ターナの身長の中半くらいの大ささの身体を見ると、ナハトはホートルットの様だった。しかし、世間一般に知られているホートルットは、すばしこくてずる賢くて…狡猾的であったりと、やや陽気な印象を持たせる種族であるが、ナハトのように刃物のように鋭い殺気を放つホートルットは見た事がない。

「…ホートルツトか。一時の間の仲間であろうが、その間にそちらが求める人物が見つかるという保証は持てない。それでもいいなら」

「仲間…？ 言ったはずだ。私はお前たちに『付き合っつてやる』と。それ以上でもそれ以下でもない。…もつとも、そんな短い間で私の求める相手が見つかるとも思っていないしな」

ターナの問いに、冷たくナハトは答えた。それ以上何を聞いても無駄だと悟った二人は、ある種の不信感を抱きながらも、ナハトの申し出を受けることにした。

「しかし、またえらく急な話だな。俺達が悪の戒律だと知っての事で言ってるんだらうな？ そうでなければ…」

「単なる気まぐれだ。私の手助けが必要か、必要でないか。お前たちに選択する理由はそれだけで十分だらう？ 私も御人好しではない。決めるなら可及的速やかにしろ」

盗賊能力を持つナハトを、ここで手放すのも惜しいという考えもあった。それに、一人でも人数は多い方が何かと便利だらうという考えもあった。

この滅多にないチャンス逃すのも惜しいという気持ちもあった。二人は、ナハトの申し出を受けることにした。

宿は不要と言うナハトは、また明日酒場で会おうと言い残し、その場で別れ、二人はホスバーンの宿へと向かい、そのまま床についた。

考えてみれば、枕のある寝床で眠るのはどれくらい久しいかと、ふとターナは思い起こしていた。

旅に出てから長い、宿で泊まった記憶が殆ど無い。大半が野宿でここまで来ていた。

ドーガはその体格上、馬小屋で寝ることになってしまったが、当の本人はあ

まり気にもしていない様子で、藁の上に身体を放るとそのまま寝てしまった。ターナは、遠く離れた故郷の匂いを思い出そうとしていたが、長旅の疲労が溜まっていたのか、記憶を辿るうちにそのまま深い眠りに落ちていた。

翌朝。

*

目を覚ますと、窓の外から太陽の光が部屋の中へ差し込んでいた。それは眩しい位にきらきらとしていた。

窓の外を見ると、ちょうど馬小屋の下のように、同じく今起きたと思われるドーガが、猫のそれと同じように不格好に伸びをしていた。

しかし、駱駝と猫の体の構造は違うので、当然猫の様には上手くいかず、ぎこちない奇妙な伸びになっている。その姿がどこか滑稽で、思わず笑いがこみ上げてきた。

早々に身支度をして、ナハトや指名した仲間が待つ酒場へと向かう。

侍と薬草師の職業だけで、二人の名前などの詳細は聞かずに、二つ返事で返してしまつたため、どのような人物なのかは全く想像できない。

不安と期待を募らせながら、酒場の扉を開いた。

「おう、二人…とも早かったな」

何故か『二人』という言葉が詰まらせながら、酒場の主人が手招きをする。

それもその筈であろう。一人は確実に一人と呼べるが、もう片方は人の言葉を喋るものの、姿形は駱駝そのものである。人としてカウントしていいのかわからないからだ。その酒場の主人の近くには、ナハトもいた。

「いい朝だなオヤジ。例の二人は来てるんだらうな？」

「ああ、二人とも今来たばかりだ。待ってる…」

そう言うと、主人は近くのテーブルに座る二人に声をかけに行った。そこに見えた姿に、ターナとドーガは見覚えがあった。

「あや、お兄ちゃんにラクダさんじゃないでしか!」

大きな垂れた耳が特徴的なノームの少女シューネと、その隣にいるのは彼女と出会った時に毒に冒され苦しんでいた人間の少女。

「貴方がたはあの時の…？ まさか、こんなところでお会いするとは、思いもありませんでした」

「びっくししたでし。シューネの冒険者としての最初のお仲間さんが、お兄ちゃんとラクダさんだけでなくて、このお姉ーちゃんも一緒だったなんて!」

シューネはターナ達と別れた後、医者である元薬草師の身内から、ただ単に薬草に関する知識の身を修習するのではなく、冒険者として経験を積むことによって得られる知識も多いと言われたが、その場では言っている意味が完全に理解することはできなかった。そのうち何時かわかるだろうと、冒険者として登録したのだった。

「私はツバメと申します。己の技を磨く為、修行の旅をしていました。途中、あのような状態になってしまい、自分の無力さを痛感したのと同時に、助けてくれた貴方がたに恩を返したいと思っておりましたところ。私でよければ、是非とも…」

シューネの横で、ツバメと名の侍が軽くお辞儀を言った。

まだあどけなさが残る顔立ちではあるが、まっすぐ芯が通った物言いは、聞いていて鼻につくことはなかった。むしろ、彼女の性格がそのまま出ているようだった。

「シューネも世界一の『おいしや様』になるために、たつくさんシュギョーするよ!」

ツバメの横で、シューネが飛び跳ねながら必死にアピールしている。

「…まあ、冒険は人数が多いほど楽しいもんだ。俺とターナの兄さん、それにナハトの奴ともどもよろしく頼むわ」

「こちらこそ、よろしく願います」

それぞれ軽い挨拶を交し、酒場の外へ出ると多数の冒険者パーティが、洞窟探索から戻ってきているのが見えた。探索で手に入れた物を鑑定や買い取りをしてもらおうと、大きな荷物袋を抱えてジャッジボル商店に持ち込む者もいれば、真っ先に体の疲れを取ろうとホスバーンの宿に戻る者たち、上機嫌で鼻歌を歌いながら酒場に入っていく者たち…。それぞれが一時の安らぎの時間を過ごしていた。

その中で、ロハグラ寺院に数人分の亡骸を運び入れる冒険者パーティが目に入った。運び込む人数と、運ばれている数を合わせても六人にはならないのが、妙に気になった。

「これはどうした事だ？ パーティの人数と合わないようだ」

ターナが、最後の亡骸を運び終えた、闘士らしい青年に声をかけた。

闘士は、額の汗を拭いながら荒い呼吸を整えつつ言った。一人運び込む事は、ある程度の腕力を持った闘士なら軽いだろうが、重装備をした冒険者となれば、それは別の話だろう。かといって、装備を捨てて運ぶこともできないだろう。復活して丸裸と言うのも問題がある。

「オレたちは最初六人パーティだったんだが、ちよつと調子こいて最下層へ行ったら、一気に半分が減ってしまったな。死亡状態ならまだ良かったんだが、途中で白いモークリケッタ？ ……みたいなやつに襲われて、仲間の死体を回収できずに逃げ延びてきたんだ。ホントは、どんな状態でも回収してやりたいんだが、今のオレたちのレベルでは、あの白い奴に到底かなわねえ…。万一回収できても、奴から確実に逃げられるなんて確証もねえしな。そんな中、同じ階層でくたばってたパーティを見つけたんだよ。せめて、仲間の償いにと残ったオレ達三人で何とか運び出せそうな数をここまで持って来たんだ。オレが二人担いでも、四人が限界だったな。復活する確率としては、死体の損傷状態から見て、せいぜい一人か二人ってとこだな…」

肩を落とし、深いため息をつきながら闘士は寺院の方を見つめた。

入口の大きな扉が開き、彼の仲間と思われる二人が神妙な面持ちで出てきた。

「…だめだったわ。三人はあちこち損傷がひどくて、リゼフェイドでも無理だったわ」

暗い表情のまま、鮮やかな僧衣を着た女僧侶が言った。

もう一人は見た目だけで判断すると、狩人のようだ。こちらもやや暗い表情をしていた。

「残りの一人は、なんとか一度灰化しながらも復活はできた。出来たらこちらで引き取っても良かったが、あいにく戒律が違っていたので、引き取りはできなかった」

「戒律が違うというのは、お前たちの戒律は…？」

「ああ、オレたちは善なんだ。生き残りが引き取れねえってことは、悪なんだろうな。これも何かの縁だと思ってたんだが、残念だ」

街の外でだと、人数に余裕があれば戒律が違っていてもパーティを組めることはできると聞いた事はあるが、街の中ではそう言ったことはできない。それがいつからかは知らないが、冒険者の間では暗黙の了解になっていた。

もつとも、他所の大陸では街中でも善と悪の混成パーティを組める…という話も、稀にはあるが聞いたこともある。しかし、冒険者の誰もが自分と同じ戒律同士でパーティを組みたがるのが殆どであったため、その話も噂程度の信憑性しか持ち合わせていなかったのが事実である。

「だったら…」

と、ターナが切り出した。

「生き残った冒険者はこちらで面倒を見よう。こちらは一人分の空きはある。丁度、一緒に探索する仲間を集めていて、あと一人を探していたところだ」

「そ、そいつはありがたいというか、おたくら…どう見ても悪の戒律には見えないんだが…」

「ま、戒律は見た目の良し悪しで決まるわけじゃねーし、それに寺院の人も引き取り手の事で気を揉んでる様だしな。そいじゃ、お互い生きてたら何所かで会おうぜ」

ドーガがニツと笑って寺院に入って行った。

闘士達のパーティは、ターナ達が寺院に入っていくのを黙って見つめていた。

「それじゃ、私たちはどうしましょうか？ 取りあえず、酒場で募集掛けますか？ それとも一旦宿で寝ます？」

「そうだな…。まずは酒場で適当な人員を集めよう。少しでも早くあいつらを地上につれ戻したいしな……」

「こちらが先程復活されたランベルドさんですが、あなた方が彼の引き取り人でいらっしやいますか？」

口ハグラ寺院の奥にある薄暗い部屋で、この部屋の管理人らしき僧がターナ達を見て問いかけた。

小ぢんまりとした部屋は、大きな蠟燭一本の頼りない明かりに照らされて、ある種の不気味さを醸し出している。ここに冒険の途中で死亡した冒険者たちを、一時的に安置している場所であろうが、思ったほどの死臭というものはしなかった。その代りに、一度目の蘇生に失敗した際のものかはわからないが、おそらく冒険者の灰の一部であろうと思われる、灰白色の砂のようなものが、部屋の隅に薄く積もっている。定期的に掃除はされているだろうが、それでもうっすらと積もっているところを見ると、申し訳ないが運が悪い冒険者が多いのだろう…。

「お引き取りの前に確認しておきますが、彼は戒律が悪の錬金術師。お引き取りになられる方々の戒律は同じ悪か、中立の方に限られますが、よろしいでございませうか？」

フードを目深に被り、決してその下の表情は見えなかったが、声から判断するに相当の年老いた人物だと思われる。その口調は、淡淡としていて感情をくみ取ることとはできない。おそらく長年この仕事に就いているのだろう。年月を重ねるうちに、同情の念は薄れ、単なる作業としてしか認識できなくなったのだからかと、余計な事を考えてみる。

「我々は、勿論悪と中立の戒律のパーティであることに間違いはない」

「よろしゅうございます。時々お引き取りになられる方の戒律と、対象の方の戒律が正反対でトラブルが起こることが在ります故、こうやって事前に確認

させていただいております…。それでは、こちらが先ほどの方に「ございます」

僧に呼ばれて出てきたのは、長く蒼い髪が目を引きエルフの男だった。その表情は、今だに状況が飲み込めていないような顔をしていた。

「こちらが、貴方様を引き取りたいと申されました方々でございます」

「錬金術師のランベルドといひます」

ランベルドを加えた一行は、彼のおかれた状況を説明するために、一旦宿に戻ることにした。宿の方が、酒場の喧騒も混じらずに、静かに話をする事ができる。

死んだ仲間をイシュマグまで連れ戻してくれた、闘士達のパーティの事や、自分たちの目的を丁寧に説明した。

「…そうだったんですね。彼らが僕や、僕たちの仲間をここまで運んでくれたんですね。彼らも同じ状況になりながら。あの洞窟の最下層のどこかに、原因があるような気がする…いえ、あると確信しています。他の階にも増して魔物の強さも数も違っていました。…ですが、力不足であのようなことになってしまい、仲間まで失う羽目になるとは…」

エルフと言うのは、もっと誇り高い気質を持ち合わせ、他の種族とは違う雰囲気を持っていたと思っていたが、悲壮感に打ちひしがれる彼を見ると、もっと自分たちと近い感じを持つてしまう。

ここ最近の時代は、人間だのエルフだのドワーフだの何だの、種族間の隔たりが薄くなってきたような気がするのには確かだった。

昔は、それぞれの種族がもっとそれぞれの種族独自の性格を見せつけていたはずだが、それがいつしか徐々に薄れてきて現在に至る。

今では、種族独自の言語を使う事も非常に少なくなってきた。その代りに、

全ての種族共通の言語が生まれ、現在ではそれが普通になっていた。

——それが良いことか悪いことかは解らないが。

「…我々でよければ、もう一度あの洞窟に潜ってみる気はないか？ 仲間の無念を晴らすためにも、彼らが成し得なかった目標の為にも」

その言葉に、エルフの錬金術師は目を閉じ黙ったまま何かを考えていた。

*

夜がそろそろ明けようとしていた。

遙か遠く地平線から太陽が、夜の闇を消し去るかのように少しずつゆっくりとその光輝く身体を見せ始めていた。

その光に照らされて、地面から不気味に「ごうごう」と風の音がする。時折吹く風が、黒々と開いた穴に吹き込んでいたためだろうか。

ツン・クーンの洞窟—— 普段は特に危険も少なく、見習い程度の冒険者たちがピッケル片手に、小遣い稼ぎとして鉱石を掘り出す姿もよく見かけられていたが、突如降って湧いたかのように多数の魔物が徘徊するようになってからは、その様相を変化させた。

今では、腕に覚えのある中級程度の冒険者も多く出入りするようになってきた。その殆どは、先日のお触れによるものが大きい。

その入口には、王国の兵士が常にこの洞窟を行き来する冒険者たちの流れを見ていた。

昨日は意気揚々と入って行った奴らが、次の日には血相を変えて慌てふためいた様子で、この洞窟を出ていく。死んだ仲間を二人掛りで担いで出てくる。入ったときり帰ってこない。帰ってこなかった冒険者が、洞窟内で魔物の餌にされていたら、それを見た他の冒険者から聞かされる。

…等々の生々しい状況が、彼らに聞くまでもなく耳に入ってくる。

時には、命からがら何とか地上まで出てきたは良いものの、全身に回った毒にやられ、目の前で死なれたという事も多々ある。更に血生臭い匂いがこの入口まで昇って、吐き気を起こさせたこともあった。

そんな冒険者の生き死にを間近に見てきた兵士たちの目に、新たなパーティが入ってきた。

(ああ、また命知らずが来たか)

(今度はどんな顔して逃げて出て来るか?)

(それとも、そのまま洞窟の中にくたばって魔物の餌になるか?)

(鼻歌でも歌いながら出てくるか?)

(いずれにせよ、ここで何百人と色んな冒険者を見て来た。今更奴らがどうなるうが、俺の知ったことではないな。そんなことより、早いとこ交替の時間がこねえかなあ…)

と、舐めるように冒険者たちを見ながら、小声で相棒と話していると、その冒険者たちの一人が話しかけてきた。

「ここが、ツン・クーンの洞窟か？」

「ああそうだ。…ああ。入ったら、入口の扉は厳重に閉めてくれよ？ この前なんぞ、阿呆な冒険者が開けっ放しにしてたらしく、ここまで化け物が出てきてたからな」

(何だコイツら…。奇妙にラクダまで連れてやがる。荷物持ちか?)

ありがとう。と一言言うと冒険者たちは洞窟の中へと入って行った。

緩やかな坂道を、松明のうす明りのみを頼りにゆっくりと下っていく。時々背中から、地上から吹き込んできた冷たい風が通り抜ける。それはとても気持ちいいものではなかった。

洞窟と言うと、じめじめとして湿っぽいものだと思っていたが、ここはそうでもなかった。おそらく、この時折吹きこんでくる風のせいでもあるのだろうか、比較的乾いた空気を感ずる。

どれくらい坂道を下ったかは覚えていないが、平らな地面を踏んだところで、ずっしりとした重みを含む大きな扉の前に立っていた。

扉の前に立っているだけでも、その奥から漂ってくる魔物の気配をピリピリと痛い位に感ずる。

「さて、ここが入口の様だが、準備はいいな？」

先頭に立つターナが、後ろを振り向くことなく後に続く仲間に向うた。

「言うまでもなく」

それに仲間が答えると、ゆっくりと扉が開いた……

あとがき

今回は、さわりの部分で彼らがどういう風にしてパーティを組んだのかという事がメインなので、実際に洞窟踏破（え）に挑むのは、次回以降になるという事ですね。ハハ

酒場のオヤジが元冒険者って言うのは「もしそうだったら面白いかもな～」という、オリジナルな解釈ですかね。ちょっと年齢的にも厳しくなってきた、ここらで暢気に酒場のオヤジでもやってみるか～…みたいな。実際には暢気に構えてられないでしょうが(笑)

本来ゲーム上では、善とか悪は「性格」としてますけど、ここでは敢えて「戒律」という風に変更してます。性格が悪って言うと、ホントに悪者みたいな感じがしたので。

見た目は悪じゃなさそうなのに、実は戒律的には悪でしたーっていうのが、この場合適切かなと思った次第です。

つたない文章ですが、次回以降も読んでいただけると幸いです～(´ω`)ノ

2012 6/12 榎本 タケコ (@Enotaken)

・どうでもいい解説・(おまけ)



・ア-ト・

はじめから君主にある予定なし。
旅している理由は後でわかる。



・ツバメ・

漢字だとDQNっぽくなったので、
本文でもカタカナにした。



・ヒ-ガ・

WIZのトーガラムと
ララム-ム-を足して2で割った名前。
1077じゅな110オマージュだ(笑)死)
エジプト人ではない。決らない。



・ナハト・

性別?にしたけど、あ、はいが、このは
気にしたら負け。キズン。



・ランベルド・

TNRな顔の裏に貧弱な
性格になった。のと初めからSR.P1



・シューネ・

頭の縄みたいなのは ミつあみ。

~~ナハト、こまわかし。~~